The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	巻頭言 : 研究に取り組む姿勢 : いつでも夢を
Author(s)	高木, 洋治
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2004, 10(1), p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56799
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻 頭 言

研究に取り組む姿勢—いつでも夢を

An attitude toward scientific researches- having a dream for ever

平成１５年度も終わり近づき、平成１６年度よりいよいよ国立大学も独立行政化を向かえます。これと共に、今後の大学運営に関し、新たな期待と一抹の不安との入り交じった思いを多くの方が持たれていると思います。しかし、大学の使命である研究・教育・社会・国際貢献はどのような立場であれ、更に推し進める必要があります。

研究に取り組む姿勢として、私は確か大学の入学式での新入生に対するはなむけの言葉としてであったと思いますが、第 11 代大阪大学総長の山村雄一先生が述べられた「夢みて行い、考えて祈る。」が忘れられない。「これは何故であろう。これを解明したい。」と絶えず疑問に思い、また、「こういう事が実現できれば素晴らしいであろう。」と絶えず夢を見る姿勢が必要である。そして、直ぐさま、実現に向けて実行する事が肝要である。余り結果を深く考え、こういうときはどうなるのであろうとか失敗を恐れて実行をしなければ先に進まない。とにかく実現に向けて研究を実行することが大事で、それから、その結果について考えれば良い。それが素晴らしい結果であることを祈り、良い結果が得られれば非常な喜びとなり、更なる研究へと繋ぐが出来る。また、結果が失敗に終わっても落胆することはない。むしろ良い結果が得られるのは多くの研究のなかのごくひとつまみの研究である。また、失敗の中から思わぬ発見に繋がることはよく言われていることである。このように、「夢みて考え、行って祈る。」のではなく「夢みて行い、考えて祈る。」この順番が大切である。このように絶えず、夢をみて、また絶えず疑問を抱く姿勢が研究者には必要である。たまたま、平成１６年１月１０日付け朝日新聞の天声人語に物理学者で随筆家、俳人でもある寺田寅彦のことが載っていた。「目はいつでも思ったときに閉じることができる。しかし、耳の方は、自分では自分で閉じることは出来ないように出来て居る。何故だろう」。という有名な問いかけである。「眠っていても危険を察知できるから」、などと思いつきの答えは出来るかも知れない。「何となく見逃していたり、気がつかなかったりしていることに疑問を抱く。科学者に必要な才能であろう。」と述べられている。このように、大学が新たな体制になっても「いつでも夢を、いつでも疑問を」もって、研究に励んで頂きたいと思います。

大阪大学大学院　医学系研究科
保健学専攻　統合保健看護科学分野
生命育成看護科学講座（母性・小児看護学）
高　木　洋　治